

が、彼女は十年以上もアメリカで看護士として働き、臨月まで勤めていたという。優しさやバイタリティーを兼ね備えた女性である。そんな彼女にとって大きな自動食器洗い器はわたしのお友達だそうだ。

下の孫の三才の誕生日祝いに来てくれた時、私が作った子供用の小さなハンバーグステーキを口に頬張り、「あつ日本のハンバーグだ。」と言った、その笑顔は私の疲れを吹き飛ばしてくれた。

それからというもの、何度か、家族全員を夕飯に招いて、骨つき豚肉の照り焼きや、餃子や味噌汁など、日本の家庭料理をご馳走してくれて、お腹も心も満腹にしてくれた。

食生活でも子育てでも、はるかさんは、実にみごと日本流を貫いていて、アメリカ人の夫君も抵抗なくそれを受け入れているように見えた。私の娘もまた、日本流の育て方をしている。彼女の説明によると、アメリカでは、子供が泣き喚くのは親を困らせるため

ある、という性悪説を採っているという。けれど彼女達は子供が泣くのは何を訴えているのだから宥めたりあやしたりしてやるべきで、暗い部屋に閉じ込めたりすることはとてもできないと言う。どちらが正しいか、私には解らない。子育てに関するアメリカと日本の違いが、その原因かどうか定かではないがその後、はるかさんは夫の留守中に、子供を連れて日本に帰ってしまったそうだ。

そう言えば、台所で後片づけをしなから女同士でおしゃべりをしていた時、「日本の夫婦って何でも一緒っていう風じゃないでしょ。それって日本人の知恵ですよね。」などと言っていたっけ。

さて、娘の勤務する病院の、ベテランの看護士さんで、毎月一度、若い女性の研修医ばかりを自宅に招いて下さるシエレルさんは、ある日私も一緒に呼んで下さった。その日、孫達にはよそゆきのドレスを着せ、私は娘の着物を借りて着て出かけた。

郊外にある彼女の住まいはまるで家全体がホテルのように瀟洒で清潔な大邸宅だ。広い芝生の庭に面したりビンブルームは、上から下まで一面のガラス張り、夕闇迫る広い空と数本の喬木を映し出していた。

なかではガールズトークが佳境に入っているらしく、絶えず笑い声が湧き起こっていた。ひととおりの挨拶が済むと、シエレルさんはまっすぐに私の目を見詰めて、「あなたのお知り合いや親戚で、この度の東日本大震災に遭われた方はいらっしやいませんか。」と訊ねて下さった。アメリカではこちらが面映ゆくなる程、日本の大災害を心配してくれる。外科の医療チームを作って派遣してはどうかなどという話題は彼女達の職場でも、もち上がったという。

隣の部屋では、出産を間近に控えた女性が職場の仲間からベビー服などのプレゼントを浴びるようにもらって、感激の涙を流していた。

# 新薬アラカルト



## 杉本 忠夫

(虎の門病院 内分泌代謝科  
非常勤嘱託医)

ここ数年、新薬の発売が際立って多くなつてまいりました。そこで、この三十年間で記憶に残る革新的な効果のあった薬について降り返つてみましょう。

まず、製薬会社ウエルカムが世界で初めて開発に成功したタガメット(一般名シメチジン)をみてみましょう。日本では一九八三年山之内製薬がガスター(一般名ファモチジン)を開発し発売しております。これらの薬は胃粘

膜細胞のヒスタミンH<sub>2</sub>受容体に拮抗して胃壁からの胃酸分泌抑制作用をもつ胃・十二指腸潰瘍薬です。TVでお馴染みのガスター10(テン)はそのスッチOTC(処方箋の必要な指定医薬品から一般向け医薬品に厚生省が認可した薬)として薬局でも買える薬です。

これらの抗潰瘍薬が臨床応用される前は、胃・十二指腸潰瘍による大出血は救急外来の重要な疾患でした。その

ため緊急輸血、胃部分切除を余儀なくされてきました。ところが、新潰瘍薬が臨床応用されてからは潰瘍出血は急激に減少し、特に潰瘍出血を止めるための胃部分切除は必要とされなくなりました。このように手術が減少すれば消化器外科医が失業するのではないかと思われたほどでした。

次に印象深い薬は、バイエルが開発した高血圧の薬でアダラート(一般名ニフェジピン)とよばれるカルシウム拮抗薬が挙げられます。

初めは、狭心症の薬として開発されておりました。ところが、血圧を低下させる作用が強く改めて降圧剤として見直され、その頭角を現してきました。降圧作用に加え、以前の降圧剤ではみられなかった即効性があり、口腔内に滴下するだけで高血圧が改善し緊急時に役立つものです。そのほかに、それ以前の降圧剤を内服しても改善が難しかった、下の高血圧(収縮期高血圧)を改善させる効果も確認されております。

この降圧剤の革新的な降圧効果により、血圧のコントロールが大変容易になつてきました。そのため、広く世界で投薬されるようになり、治療が困難であつた難治性の高血圧による脳出血は著明に減少してきました。

三番目に揚げるのは、一九八九年日本で開発され発売された薬です。それまでの血清コレステロールを下げる薬ではほとんど効果はなく臨床医は困つておりました。

ところが、三共製薬の遠藤章氏の永年の研究により血清コレステロールを著明に低下させる薬が開発されました。遠藤氏は青カビの中にあるコレステロール合成を阻害するメバスタチンという物質を発見しました。このメバスタチンから誘導されたHMG Co A還元酵素阻害作用を有する薬がメバロチン（一般名プラバスタチン）です。それまでのコレステロールを下げる薬より大幅なコレステロール低下作用が認められました。

この薬のお陰で高コレステロール血

症を持つ人の動脈硬化の進展がかなり予防されているといわれております。

遠藤氏はこのメバスタチンの世界的な研究開発で、二〇〇六年日本国際賞、二〇〇八年アメリカのラスカー賞、二〇一一年の文化功労賞を授与されております。これらの授賞は日本の研究の高さを世界で認められ、また日本の誇りでもあります。

この薬の仲間をスタチンと呼んでいます。最近の研究でこのスタチン群が動脈硬化のためコレステロールが蓄積した動脈壁のアテローム（血管内にとびだしている血管内の瘤）を退縮させ血管を蘇えさせることがあるといわれております。これからの研究で動脈蘇生が証明される朗報を待ちましょう。

このように約三十年前は臨床的に目を見張るような効果のある新薬が開発されております。では、三十年後の新薬を垣間見てみましょう。

最近、新薬の開発が行われ次々と発売されてきております。例えば、脳梗塞を予防する薬、インフルエンザの薬、

糖尿病、痴呆症、パーキンソン病の薬、抗ガン剤など新規に多岐の分野で多数発売されてきております。

特に、糖尿病の血糖を下げる薬が注目を集めております。この薬は二〇〇九年十二月に萬有製薬により開発・発売されたDPP4阻害薬でジャヌビア（一般名シタグリブチン）とよばれる薬です。

ジャヌビアは脾臓からのインスリン分泌を支えるように作用し血糖を下げます。また、従来より使用されていた血糖降下剤のスルフォニルウレア剤とも相性がよく、併用すると期待した以上に血糖降下作用が認められ糖尿病専門医より驚きの声が挙がっております。

一時、この新薬と一九五六年に日本で発売された先輩格のスルフォニルウレア剤との併用で血糖が下がりすぎて危険な低血糖昏睡が発生したため、糖尿病学会が日本糖尿病学会誌に警告を載せるほどでした。

今年も、このような画期的な薬の開発を期待しましょう。

# 白い一輪菊

中西美子



東日本大震災の後、白い菊が品不足になったと聞きました。たくさんの方が召され、白い菊が供えられたのでしよう。昨今花屋には、菊の花の需要が少なくなり置いてない店があるそうです。若い層の仏花離れがおきているからのようです。確かに花もちは良いですが、菊でなくても他の白い花も豊富にあるのですから故人の好きな花や、おしゃれな花もいいでしょう。

三月十一日私の次男は、松島で地震と津波を体験しました。幸い瑞巖寺に避難して、無事帰ってきましたが、ずいぶん心配しました。まだまだ復興には、時間がかかりそうだし、難題の山積みです。小学校の時の友人も仙台で転居を余儀なくしました。恩師が、明日という日がある限り明日を信じて前進していこうと、詞をくれました。何が起ころるか分らない今、日常を大事に生きていこうとおもいます。

# 作家魂・文学の鬼



志村有弘

(文芸評論家・  
相模女子大学名誉教授)

小檜山博はエッセイで、八歳まで母乳を飲んでしたこと、ことあることに母にぶたれたこと、先生にいじめられたことなどを振り返り、それで性格が歪んで、「ぼくは小説家になるしかなかった」と述べている。表現上の粉飾も少しはあるだろうが、本当は小説家になったことが楽しく、嬉しくて仕方がなく、これこそ自分の天職だと思っている様子が行間に滲み出ていて心地好い。

最後の文士という言葉がある。野口富士男・八木義徳などがそう呼ばれていたと思う。私自身、榊山潤や中谷孝雄から「人からあなたは最後の文士だ、と言われた」と聞かされたことがある。

文士とは、簡単に言えば、小説を書く人のことをいうのであろうが、文士らしい風貌というものもあるのだろう。それでは文士らしい風貌とはどのようなものか、と問われても答えることはできない。そうではあるけれど、榊山も中谷も確かに文士らしい風貌をしていたように思う。

以前、歴史小説家の火坂雅志と対談の仕事があった。和服姿の火坂はいかにも文士らしい姿をしていた。季節は冬であった。「寒くないですか」と訊くと、「和服は案外暖かいのです」と答える。「家でも和服ですか」と問うと、「家ではジャージです」と答えた。火坂は和洋折衷型の文士ということか。(?)

最後の文士という言葉は、考えてみると、いわゆる文士なる者がいなくなったということを示している。

西野辰吉は『秩父困民党』で毎日出版文化賞を受賞した作家であるが、私と同郷、それも少年時代、私の生地 of 深川市(北海道)に一時居住んでいたことから、晩年の西野とは親しく交流した。あるとき、私は西野に、「もしも原稿の依頼が来なくなったら、どうしますか」と、無礼極まりないことを訊いた。

西野は少し苦い顔をしながら、「自殺します」と答えた。すさまじい作家魂である。文学に命を懸けていたのである。

「今、自分の書いた物が活字にならないから、目立たないけどどね、作品は書いてるよ」

と語ったこともある。西野にとつて、活字化される、されないは別として、作品を書き続けることが仕事だと信じていたのである。西野辰吉は、社会の不条理に対して厳しい態度を示す人であったが、そうであるだけに自分を常に厳しく律していた。作家としてのプロ根性を体に叩き込んでいた人であった。

八木義徳も随分と創作面では苦しむ作家であった。私と保昌正夫（文芸評論家）の前で、

「年老いた母がいるのだが、母が死んでくれたら、それを書くことができののだが……」

と話していたことがある。私小説作家の業といえは業なのだが、八木の言葉に、芸術のためなら命をも犠牲にするという「地獄変」（芥川龍之介作）を思い出していた。絵師良秀は、地獄変の屏風を描くために、自分の娘と自

分の命を犠牲にしてしまう。八木は母の命と引き換えに作品を書こうとする。これもすさまじい作家魂である。

物書きが物を書くことができなくなるのは、辛いことである。晩年の林富士馬（詩人・評論家）は、「詩や評論を書くことはできないが、手紙なら書くことはできる」と言つて、手紙で自分の文学を創造しようとしていた。

榊山潤が他界する半月ほど前、榊山夫人から「一度顔を見せてほしい」と電話で言われ、横浜在住の榊山を見舞いがてら訪ねていった。夫人は、榊山にウイスキーを飲ませていた。「肝臓が悪いのに、よろしいのですか」

と訊くと、夫人は「いいの」と笑いながら飲ませていた。見ると、沢山のウイスキーを買い込んでいる。今にして思えば、夫人はこのウイスキーがあるあいだは夫が生きていてくれる、そういう願いを込めて、多量のウイスキーを買い込んでいたのではないか、と思う。疲れるのか、榊山はすぐに布団に横たわった。私が枕元に行き、榊

山文学の話をする、涙を流した。

「ああ、この人も文学に命を懸けていたのだ」としみじみ思った。それからまもなくして榊山はこの世を去った。夫人が、

「榊山はもう生きようという気がありませんでしたもの……」

と話していたのを鮮明に憶えている。

原田種夫は、「九州文学」の発行人を務め、博多で独自の文学活動を行った人であった。着流しの原田が街を歩く姿は、博多のひとつの風物詩であったという。原田の全集五冊が国書刊行会から刊行されたとき、原田は「自分には全集だけが残った」と語っていた。大都市博多に住んでいたとはいえ、戦前・戦中・戦後という激動の時代をベシ一本で生き抜く苦勞は並大抵のことではなつたらう。作家の金字塔ともいふべき全集を出したとき、（これだけでいい）という思いであつたようだ。原田もやはり一個の文学の鬼であつた。

# 過去が現在に生き返る



志村 栄守  
(評論家)

ともかく平成二十三年は、生きるということを各自がしみじみ考えさせられ、あるいは過去を振り返らざるを得ない、歴史に残る年だったのだろうか。とりわけ、あの日を境に生活が一変してしまった、真面目に生きて来たのに、これは一体、どういうことだろう：そんな声にならない胸の内の思いは深く、広く、その余韻は交錯し、果てることはないように思われる。

「愛児のささやかな遺品を前にして、母親の心に、この時、何事が起こるかを仔細に考へれば、さういふ日常の経験の裡に、歴史に関する僕等の根本の智慧を読み取るだらう。」

これは、小林秀雄、『ドストエフスキイの生活』『序（歴史について）』に出

て来る。

もちろんこころも、一分の隙もないと思われる小林の文章なのだが、世の中にはこれを中途半端に読んだ人が発表当初から少なからずいたらしく、巻末の解説者も、ある人にはこれが「感傷的な歴史観の如く思はれた」と書いている。

しかし、小林が「歴史に関する」「根本の智慧」と書いたら、私達がより良く生きるうえでの重要なことへと通底している、これは知る人ぞ知るところだろう。

ところが二年後の『歴史と文学』では、真実、人を驚かすであろう説を展開している。

「何故、相も変わらず、年代とか事件

の因果とかを中心に歴史を教へてゐるか。それは、ともかくも歴史は通史の体裁をきちんと整へて教へねばならぬといふ陳腐な偏見が根本にあるからであらうと思はれます。」

ここはさすがに、日頃、この人を敬愛する者も言葉につまる。義務教育の段階の少年少女に、一度は「通史の体裁」で歴史を概観させることは不可欠と思われるからだ。

しかしなのだ、なぜ、ここまで頑迷なまでに？異説を展開したか、その心中は推測できないこともない。

それはごく若い頃、過去を単純に手のとどかぬ日々と望見し、諦観していつては決して解けない、人生が提供する問題との苦闘の末に、暗雲のあとの紺碧の空のような名答を得たその時の感動が、「通史の体裁」で教える歴史教育への怨念、反撥となつたと思われる。「歴史の面白さは、過去が現在に生き返る面白さに極まると言ふより寧ろ過去が現在に生き返るのと歴史が面白いのとは同じ事柄だと言ひたい。

それは過去でなくなる奇妙な事実の生活感情を通じての容認に他ならない。」

逆に『モオロアの「英国史」について』には、真つ正直に歴史に対する本音が、日常用語で語り掛けるようにこうある。ただ、学校の授業(低学年)での歴史とは別事、と考える必要があるかも知れない。

また、執念と化した感のある抗弁は、別の面から見るとこうなる。『紋章』と「風雨強かるべし」とを読む』にこうあるが、こんな何気ない話にも、本人の実体験の裏付けが色濃いのは常識だから。

「シエストフの様な(中略)極端な思想といふものは、読者に切羽つまつた観念的な飢渴のない場合、影響といふ事はほんたうには考へられないのである。」

これを逆に読むと、「切羽つまつた観念的な飢渴」、こそ、各人がその魂の深部から真の力を引き出すチャンスであり、それまで予想だにできなかった発想の存在に、開眼するかも知れない

のだ。事実、ごく若い小林はベルクソンにそれを見て、誰もが知るその後の

「逆説の人」へと急激に傾斜して行つたと思われ。 「上手に思ひ出す事は非常に難しい。だが、それが、過去から未来に向つて飴あめのように延びた時間といふ蒼あおざめた思想(僕「小林」にはそれは現代に於ける最大の妄想と思はれるが)(後略)。(「無常といふ事」)。

ここの「蒼あおざめた思想」「現代に於ける最大の妄想」と、こともあろうに否定を重畳している小林の胸の内を考えてみたらいい。ここにどれほど気持ちが入っているかがよく分かる。それはすなわち、あえて言うくと、味わつた苦汁のほどを彷彿とさせるのだ。

詳述を試みると、「切羽つまつた観念的な飢渴」の先に発見し、小躍りしたであろうベルクソンの「時間」に関する思想と、小林の傑出した個性が相乗し、周知の通りのパラドキシカルな文章の出現へと至つた、となる。

加えて、「過去が現在に生き返る」過去から未来に向つて飴あめの様に延びた時

間といふ蒼あおざめた思想」等の奇怪な! 言葉となつた背景は、以下の弁明にも明滅している。(同『序』)。「空間の三次元に結び付いた第四次元の時間として現れざるを得ないだらうし(後略)」。私達は真の「時間」を、どうしても「空間」的に、あるいは「空間」として表示せざるを得ないという、いわば桎梏しごから逃れ難い、これが一捻ひねりして言われていると見える。

それはともかく、若年時の小林の人間の成長に大いに係わつたと思われるベルクソンの『変化の知覚』という著作の「生きつづける過去」という小見出しを持つところにはこうある。(自水社・矢内原伊作訳)。

「實在は変化であること、変化は不可分であること、そして不可分な変化においては、過去は現在と一体となつていることを、断固として確信していれば、それで十分であります。」



# そこに住む子供

佐川 毅彦



友人の亘わたるが弟まなぶの守まもると飲みに行った時の話である。

守は店に入る時なんかいやな感じ  
がしてそのまま帰りたくなったが、  
中に入った。女の子たちと兄は盛り  
上がったが、弟は酒もあまり進まず、  
だまっていた。そのうち、ぶ

つぶつと説教口調でしゃべりはじめた。兄は守がなにかおかしいと感じたが知らんふりをして女の子たちと馬鹿話をつづけた。

しばらくすると守は席を立ち「一緒に行くこう」と声をかけトイレへ行った。戻ってきた守に兄はどうしたんだと尋ねた。

あまりうるさくするからあいつをトイレに縛ってきたという。

「えーっ、何いってんだ」「だから男の子だよ」と彼は女の子のとなりの席を指さした。兄はますます訳がわからなくなってきた。

弟が言うには、女の子と一緒に小学一年ぐらいの半ズボンの男の子がついてきた。最初はおとなしく座っていた。そのうちギャーギャーうるさく騒ぎ出して、いくら注意しても

聞いてくれない。しょうがないからトイレまでつれていった。ゲンコツを食らわしてやり、そこにじつとしているところとヒモで蛇口に縛りつけてやった。亘も女の子もびつくりしてトイレへ様子を見にいった。蛇口にヒモがかけられているだけで男の子はいなかった。

それで亘は、店のママになにか心あたりはないかと尋ねた。「男の子が住んでいるらしいのは知っていたけど、私は見た事がない。あまり害がないから気にしないで。これも店のウリよ」と笑っている。弟も正常にもどったのでまあいいかと飲み続けた……。

帰り際、「あの男の子のことなくママに似てたよね」と守がいう。「知らんよ」と兄は答えた。

# 大せいろ一筋

そばが好きだ。

時々喰いに行くそば屋のペテランのおばちゃんは、ほくが暖簾をくぐつて顔を出した途端に、「新規のお客さん、大せいろ一枚！」と大声で奥へ叫ぶ。ほくは、そばは一切具のない、もり、あるいはせいろに限ると思っているから、その店にはそばだけを喰いに行く。夏はもちろん、冬の寒風の中を出掛け、冬はもう一枚と、「大せいろ一枚！」だ。

この店には黒くて太めの田舎そばもあるが、あくまでせいろ一筋だ。三段に重ねられた手打ちのそばがすぐに出てくるから、一度に口に入る分量にすくってズルルと音を立てて啜りこむ。



## 桐原良光

(文芸ジャーナリスト)

つゆもきりりと縮まった好みのやつだから、そばを少しだけ浸けて啜りこむと鯉節の香りとともにそばが喉を気持ちよくすべり落ちてゆく。この店で以前に出会った旧知の女性は、病氣してからそばが啜れなくなつたと言っていた。そばが啜れる健康とともに幸せを感じる瞬間でもある。

この店のそばは、大せいろならばよくの空腹を満たすのに充分。時間が許されれば、そばを啜った何倍もの時間をかけてそば湯を楽しむ。そばの大事な成分はそば湯に多く含まれているから、いので、湯桶にあるだけのそば湯を飲み干してしまふこともある。これで干

円で釣りが来るのだから言うことはない。言うことは「ご馳走さん！旨かつた！」だけだ。

時々そばの名店を名乗る店で、ほんのすくいで終わってしまうような分量と高い料金に腹を立てて帰るといふ経験は何度かしているので、この店の分量と料金は本当にうれしい。そばはやはり庶民のものであり、ある程度の分量があつて手頃な料金でなければならぬ、と思ひこんでいるからこの店を最良にしている。老舗ではないが、ちゃんとしたそばを出してくれる。店には時にはフランス語や英語が飛び交って、日本人抜きでも楽しんでい

こともあるから面白い。

俳優の小沢昭一さんの対談集に『日々談笑』があり、すでに鬼籍に入られた元早稲田大学教授でそば研究家としても知られた高瀬礼文さんとそばについて話し合っている次のようなやりとりがあつて、我が意を得た思いをしたものだった。

〈高瀬：今の旨いそば屋っていうのは、たいてい脱サラでね、一代ですからね。そういう人たちは、やっぱり昔から、三代、四代目のそば屋、いわゆる老舗のそば屋に比べると、かなり劣等感も持っているし、実際、老舗には老舗の深さ、落ち着き、あの間口の広さ、ありますけれどもね。しかし、それだけで仕事つてできるもんじゃありませんからね。

小沢：それに甘えている店も結構ありますよ。甘えるどころか、カサにかかってフンゾリ返っている。そんなのより、昨日今日の新興のお店のほうが、日夜工夫をしてね。ハンデイがあるからこそ、がんばつて旨いものを作ろう、

客を引こうと思つてお店のほうがおいしい。…)

小沢さんは(おやじに金ができて、人をやとつて、店を抜げて、支店を出して、やれゴルフだなんだ出かけるようになると、その店はだめです(笑)。これはほんと、ふしぎにそうです)とも、また(やたら能書きいう店もありますねえ。そばはどういうふうにして食え、とかね)とも話している。

その小沢さん、子どもの時はうどん党。年をとつてから父親の好きだった食べ物に回帰して、そば好きになつたらしい。そして(そば好きは老化現象、というふうには、やや自虐的に、私いつているんですがね。と同時にね、そばっていうのは、年をとらないと、あの味はわからないということも。とにかく、脂っこいもん、しつこいものというのがだんだんつらくなる。…)と語る。話は、役者の芸についても及び、(若いときはね、しつこく、油っこく芸をやつたんですけどもね、だんだん、そういうことが全部無駄で、わ

ずらわしいことのように思えてきて。…)と展開して、(そばの味と、どこか似てるような気がするんですよ)と、うまく結び付けるのだ。

間もなく古稀を迎えるほくも、脂っこいものは苦手だ。そば好きは、間違ひなく(老化現象)のひとつであろうと思う。肉より魚と野菜、洋食より和食という食傾向になつてからもうかなりの時間が経過している。それでも膝関節が油切れになつてはいけな思つて、時々肉を喰つたり、ネパール人たちがやつている店でカレーライスを楽しんだりもする。なによりは、カミサンが何と言おうと意固地ではないと自称しているから、駅や職場近くの立ち喰いそばも喰う。立ち喰いそば店では、具入りの温かいそばも喰う。フトコロの寂しい時に喰つてることが多いかもしれない。

なんだ(大せいろ一筋)じゃないやん!と言われれば、これに返す言葉はない。

# 栗きんとんと蒲鉾のあいだ



片岡義男

(作家)

今年の夏は夏至の日に鰻を食べた。確か知人たちがふたりといっしょに、三人で。僕は鰻ではなくてもよかったのだが、彼らふたり、正確には彼女と彼が、鰻もい、と言ったから、鰻となった。鰻のあいだ、いろんな話をした。夏至のことも話題になった。夏至という言葉はなかなか好ましいし、見た目も悪くない。短編小説の題名にいいのではないか、と僕は言った。しかし、ただ単に夏至だけでは、愛想がなさすぎる。いま少し言葉が加わるといい、というのが僕の意見だった。鰻はそのあたりで終わった。

鰻のあと、僕は彼女とふたりで、コー

ヒーを飲んだ。そのコーヒー代を僕はちは割り勘で支払った。なぜだったかもう思い出すことは出来ないが、そのような成りゆきとなったからだ。割り勘で支払って喫茶店を出ながら、割り勘の夏至の日、というフレーズを僕は思いついた。編集者である彼女に鑑定を依頼すると、短編の題名として使えるのではないか、ということだった。

だから二週間ほどあとに僕は、割り勘で夏至の日、という題名で短編小説を書いた。いま書いているこの文章が活字になる頃には、その短編はもう雑誌に発表されているはずだ。それほどいい題名だとは思っていないが、それ

はこのフレーズだけを問題にするからで、その題名で書いた短編小説には、まさに絵に書いたかのように、ぴったりの題名となっている。したがってそれはそれでいいだろう。

この短編を書き終えた頃、いつもの仲間と四人で、たいそう好ましいイタリ料理の店で、呑気な夕食の時間を過ごした。デザートメニューのなかに、三種類の桃のデザート、というものがあつた。このフレーズを見た瞬間、これはいい、題名に使える、と直感した。他の三人の意見を求めたところ、三人とも熱意を持って賛成してくれた。だから僕は、三種類の桃のデザー

ト、という題名で、間もなく短編小説をひとつ書く予定でいる。内容はすでに細部まで決定している、あとは書けばいいだけだ。

おなじイタリー料理の店で夏の始まりの頃、ほぼおなじ仲間四人で夕食を楽しんだとき、日本のどこの港で捕れた蛸のカルパッチョを、前菜のひとつとして食べた。たいそう良く出来た蛸で、料理は巧みなものだったから、一匹の蛸のカルパッチョを、あつと言う間に平らげてしまった。このときにも僕は短編の題名を思いついた。ヴァニシング・オクトパス、という題名だ。消えていく蛸。蛸が消えていく。消えていった蛸。日本語なら、蛸が消えていく、というのがいちばんいいかと思うが、ヴァニシング・オクトパス、という片仮名書きも捨てがたい。これに関して、題名として使つて短編を書く予定は、まだない。

仲間と食事をしていゝあいに題名を思いつくことが多いのですか、という質問があるなら、そうかもしれませ

ん、と答える他ない。僕の他にさらに三人を加えて合計四人が食事のテーブルを囲んでいゝと、みんなそれぞれにいろんな話をする。ほどよく弾みのついた上での話だから、どの話も呑気に開放されていることが多い。だから思いもしなかつた視点から、思いがけないことが話題になる。先日の夕方もある居酒屋で、居酒屋の巨匠と僕たちが呼んでゐる画家が、隣のすわつてゐた妙齡の編集者に次のようなことを言つてゐた。

「幕の内弁当をよく観察してごらんよ。四角い入れ物のいっぽうの片隅に、栗きんとんが入つてゐるとすると、その隣にあるのは蒲鉾ときまつてさ。しかし、蒲鉾に栗きんとんの甘さがかくつてゐないけなくて、栗きんとんと蒲鉾とのあいだには、緑をギザギザに刻んだ笹の葉が一枚、はさんでゐるのさ。食べてしまえば胃のなかでいっしょくただけど、食べるまでは、おなじ幕の内弁当のなかの親しい仲ではあるけど、礼儀もまたきちんとある

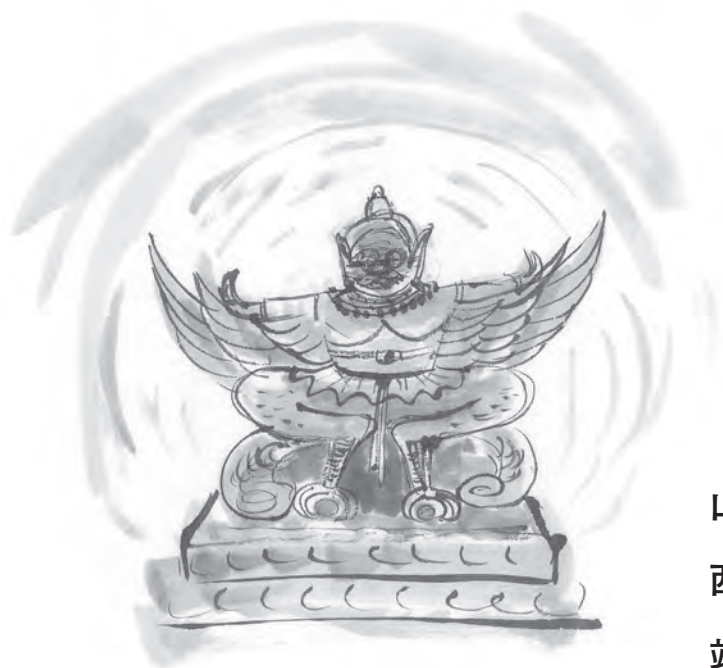
わけだよ。栗きんとんの甘さはそれだけで独立してゐてもらいたいし、蒲鉾は山葵醤油を待つてゐる、栗きんとんを待つてゐるわけではないんだ」

彼のこの言葉のなかにある、栗きんとんと蒲鉾のあいだ、というフレーズを、いま書いているこの文章の題名に、僕は使つてゐる。

彼とは居酒屋へしばしば同行する。ふたりが気に入つてゐる店のいくつもの壁に貼つてある。品書きの短冊がびつしりと貼つてある。品書きをひとつずつ点検していくと、なかなか楽しい。僕がいまもつとも好いてゐる品書きは、塩らつきよう、とだけ書かれた短冊だ。これは短編小説の題名に使える、と僕は思つてゐる。塩らつきよう、だけではどうにもならないが、これを部分品に使つて、塩らつきようの右隣り、というフレーズをひねり出すと、そこには物語がすでにある。染みらつきようの右隣りに、どのような品書きがあればいいか。

# 壬辰元旦

山西 靖彦



得意禹門途  
意を得たり禹門の途

逐龍金翅紆  
龍を逐つて金翅紆る

才知何足持  
才知何ぞ恃むに足らんや

好事不如無  
好事も無きには如かず

毎年、年賀状には、その年の干支にちなんだ漢詩を記載して親しい人達に送っている。

今年の干支は壬辰なので、竜にちなんで「壬辰元旦」と題する五言絶句を作った。右の漢詩がそれである。

起句の「禹門」とは、古代中国の禹王が切り開いたと伝えられる滝のような水門で、魚がこの水門を登り得れば竜に変じることができることから竜門ともいう。「登竜門」という言葉はここから出ている。

承句の「金翅」とは、古代インドの伝説上の怪鳥ガルダのことで、竜を常食にするといわれている。

この二語が理解できれば、大体の意味も分かると思うが、大意は「禹門を登って竜になったと得意になつていと、上空では金翅が狙つて待つてゐる。才能や知恵ばかりを頼りにしては失敗することもある。好い事が起こるよりも、何事も起こらない無事であることのほうがより望ましい。」ということである。

起句と承句は対句で、転句と結句も対句であり、全体が対句仕立ての全体格の詩である。また、「途、紆、無」と起句にも韻を踏んだ虞韻の詩である。「好事不如無」の句は「碧巖録」に出ている語句をそのまま借用した。この句に平仄を合わせて転句を作り、更に韻と平仄を合わせて、パズルを組み立てるように漢字を当てはめて、起句と承句を作ったのがこの詩である。

「説苑」という本に次のような話がある。「木に蟬が止まって朝露を飲ん

でいる。蟬は露を飲むことに夢中で、後ろにカマキリがいることに気付かない。カマキリはまた木に張り付いて身を隠し蟬を捕らえることに気を取られて、背後で雀が狙っていることに気付かない。雀は雀で首を伸ばしてカマキリに夢中で、下からはじき弓で人間に狙われていることに気付いていない。」というのである。

人間世界の実情もこれとさほどの差はない。まったく油断も隙もない。からくりの中にからくりが隠され、予想のつかぬ展開をするのが、人の世の常である。人間の才能や知恵のみでは、どうすることもできないことが多い。

優れた才能や知恵は安易に外から伺い知ることができないように奥深く秘めて、世間からは、むしろ愚直であると思われていることの方が厳しい現実を生きていくうえに、より災いが少ないものである。

「得意冷然、失意悠然」という言葉があり、また「好事魔多し」という言葉もあるが、事が自分の思いどおりにな

るような時こそ、他人のねたみを買うことがないよう、むしろ気持ちをひきしめてことあたれなければ、思わぬところで足元をすくわれることにもなりかねない。

この一年「好事不如無」と自分を戒めて、無事に辰年を送りたいと考えている。

